

九識(阿摩羅識)という霊の世界を解説する方法を用いて、依頼者に回答を与える宗教者である、と僧侶たちは説明する。

右の六人が、カミサンに代わって役割を担当している宗教者であるが、問題は、彼らがシャーマンに該当するかどうかである。

第一のオガミヤと第二の僧侶は、双方とも役割を果たす際に、神霊と直接交流をする性格を具えているので、彼らをシャーマンの宗教者と位置づけることが可能である。ふつう僧侶は「通常意識において、人間・社会を代表し、霊的存在に対して一方的に働きかける宗教者」と規定されるプリーストとして位置づけられるが、右の僧侶はシャーマンの性格も具えており、「シャーマンのプリースト」と呼ばれる存在である。ところが、第三の霊断師は、役割の上から見れば、シャーマンと変わりはないが、彼らは「通常意識において、呪力・霊力を具体的に利用して現実的問題を解決しようとする宗教者」であるマジシャンの性格を有しているが、シャーマンの性格は見られない。とするならば、第一と第二の宗教者がシャーマニズムの中心ということになる。だが、現実の姿は、霊断師が複合化した形で展開している点に注目しておきたい。

プリースト、シャーマン、マジシャンの三者は、儀礼的役割を果たす際に見せている霊的存在との関わり方を基準として類別された理念型であり、現実型は、言うまでもなくその性格が、多かれ少なかれ、混じり合って現れている。右のシャーマンであると共に霊断師でもある宗教者の本務が、プリーストとしての僧侶である、というのはその例である。最近の研究成果

には、マジシャンの概念にシャーマンを含めている見解が見られるが、理念的には両者を区別した方が生産的であると、筆者は考えている。

幽霊能における告白——その類型と機能——

今泉 隆裕

そもそも幽霊能は、諸国一見の僧(ワキ)の前に、幽霊(シテ)が姿を見せ、土地の伝説、あるいは生前の身の上を語り、僧との問答もあるが、大半は幽霊の告白で、幽霊は死後、地獄に落ち苦しんでいることを語り、その罪障を懺悔する。そこで僧は引導を渡して、幽霊をその苦患から解放する、という筋立である。その配役は、シテを幽霊(死者)、ワキを僧とするものがほとんどで、その意味において、かなり類型化されているといえる。こうした能は一般的には「夢幻能」というが、その構成の共通性から脇能(神能)を含むことがあり、神をシテとするものと、幽霊をシテとするものを区別したいと考える。そこで一般的ではないが、夢幻能で幽霊を主人公とする作品に「幽霊能」の語を用いている。今回の発表では幽霊能における告白の機能について若干の考察と展望を述べた。このことは能における幽霊が怖くない原因を説明することにもなる。

幽霊能における告白はすべて懺悔形式である。巷間では祟ると考えられる非業の死者をシテとして登場させたとしても、幽霊能では「恨み」「怨念」という対象をもつ感情表現はあえてさげ、死者を仏教的世界観の中に対置し、生前のおこないを否定的に解釈(評価)させる。そのため「悔いる」「惜しむ」「執

着「執心」「妄執」「無念」といった自己完結した感情表現(内省的)を用いることで懺悔告白を促し、そうすることで幽霊自身の問題にすべてを転嫁することになる。こうした告白のパターンは結果的に幽霊を畏怖の対象ではなく、いわば救済の対象へと変容させることとなった。では、こうした告白のパターンはどのような機能(役割)を担うだろうか。

ブライヤン・ターナーによれば、キリスト教における告解はもともと信徒の仲間うちでおこなわれていた。それがやがて、一般化され、告白は「自らの罪を、それに対する赦免の権限を持つ聖職者に訴えること」で内面を吐露して浄化作用(カタルシス)をもたらす、治療儀礼としての要素をもっていたが、告白が強制されていく過程で(制度化されていく過程で)、人々は赦免されることよりも、罪に対して大きな不安を抱くようになり、懺悔の制度化によって罪に対する潜在的な不安が増大したという。これをヒントにみてみるなら幽霊能は、他人の懺悔の様子を舞台に仕組み、幽霊自身が懺悔し、告白すること、その劇を繰り返し観衆に現前化することは、ターナーの言葉を使えば「罪の意識を顕在化」することにつながるであろう。つまり観衆は仏教的世界観を内面化させていき、仏教的なモラリティーにもとづいて自らの行動を監視するようになるのではないかと察せられる。能の大成期、とくに修羅能は、武将たちをはじめ殺生を生業とする人々に罪の自覚を促し、その赦しの物語を劇化したものとして受容されたものではなからうか。

勧進に進出した頃、田楽能は、亡霊供養を仕組み、陰惨な描写で地獄の苦患を強調する内容を前面に出した。やがて時代が

下り世阿弥によって夢幻能が洗練したかたちで完成した。このときには血なまぐさは消え、貴人本位となり形の上で花鳥風月にことよせた幽霊の懺悔を仕組むことになるが、(それを意図したかは別にして)結果的に死者に対する畏怖の念、他界に対する恐怖も減じたのではないかと考えられる。

さらに懺悔告白形式の採用は、平板な事件の叙事的記述を、本人を幽霊として登場させることで抒情的な表現に変換させ、他者(の内面)に対する想像力を促すことにつながった。それは亡霊供養の唱導劇の構成が促した想像力だといえる。その一端を垣間見た。

祖霊を「作る」儀礼——シヨナ族の祖霊信仰と憑依——

松平 勇二

はじめに

「祖霊を『作る』儀礼」(*Kugadzira Mudzimu*)は、ジンバブエ共和国のシヨナ族の儀礼である。この儀礼は、ある人物に憑依しようとしている霊を特定し、霊媒師を誕生させる儀礼である。

シヨナ族はジンバブエの全人口の約八割(約一〇〇〇万人)を占める農耕民である。彼らは伝統的に祖霊や精霊を信仰の対象としてきた。祖霊が憑依する霊媒師は、肉体をもった祖霊、つまり祖先そのものとして扱われる。位の高い霊は、シヨナ族の各クランの宗教的かつ政治的リーダーである。*Guns and Rain* (David Lan, University of California Press, 1985)は、一九七〇年代に起きたジンバブエ解放闘争と霊媒師の関係を明